

「令和4年度飼料用米多収日本一 関東農政局長賞」表彰候補者の取組概要

【千葉県】

褒章名	関東農政局長賞
候補者名	コシカフ テルシゲ 越川 光重
所在地	千葉県匝瑳市
品種名及び 作付面積	アキヒカリ 約 5.0ha
10a 当たり収量	722kg/10a
地域の平均単収 からの増収	143kg/10a
取組内容	<p>【経営形態・経営面積・作付品種及び各面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 本人、父、母、妻による家族経営で、雇用無し。経営面積約は 8.8ha。 ■ 主食用米(あきたこまち、コシヒカリ)約 3.2ha、飼料用米(アキヒカリ)約 5.0ha。 ■ 地域の離農者から依頼があれば、耕作放棄地発生防止の観点から 10～15ha までの規模拡大も視野に入れている。
	<p>【多収品種への取組状況(取り組んでいる期間や経緯等)・品種選択の理由等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 米価低下への対応策として、約 10 年前から飼料用米の作付に取り組み、専用品種を増やして経営の安定化を図っている。 ■ アキヒカリの栽培経験があるため。また、耐倒伏性を持つアキヒカリは、晩生のコシヒカリを考慮して、刈取時期の調整ができるため。
	<p>【多収を達成するために取り組んだことについて】 (播種形式・施肥方法・水管理等、生産性向上に向けた取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ほ場整備が終わっている区画に集約して飼料用米を作付することで作業を効率化。 ■ 土作りとして稲わらのすき込みと、堆肥等の散布を行う。
	<p>【その他コスト削減等の取組があれば具体的に記載】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 苗立枯病の予防薬を、育苗時に播種と同時施用。 ■ 田植機装着型の農薬散布機で田植え時に除草剤を散布。 ■ ドローンの農薬散布で病害虫防除、ラジコンボートで除草剤散布等、機械での省力化。ドローン作業は地域内所有者に委託し労力軽減。 ■ 農薬を JA から大口購入することで費用を抑えている。 ■ 刈取り時期を遅らせ、立毛乾燥することで乾燥時間を短縮している。 ■ 籾のままフレコン出荷することにより、労力を軽減している。 ■ 匝瑳市内 3 地区の飼料用米生産者で飼料用米生産者部会を形成し、JA での農産物検査と、部会内での出荷を一括で行い効率化を図っている。 ■ <u>地域内流通を行っており、飼料用米を提供した市内畜産農家から得た堆肥を土作りに利用すると共に飼料用米の運送コスト等の削減をしている。</u>

「令和4年度飼料用米多収日本一 関東農政局長賞」表彰候補者の取組概要

【静岡県】

褒章名	関東農政局長賞
候補者名	ヨコヤマ ホサク 横山 保作
所在地	静岡県御殿場市
品種名及び作付面積	どんとこい 約 2.3ha
10a 当たり収量	655kg/10a
地域の平均単収からの増収	171kg/10a
取組内容	<p>【経営形態・経営面積・作付品種及び各面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 本人、妻、息子による家族経営で雇用無し。 ■ 経営面積 9.9ha のうち水稲は約 9.3ha で、主食用米(コシヒカリ等)約 5.6ha、飼料用米(どんとこい)約 2.3ha、もち米(峰の雪もち)約 1.2ha、米粉用米 0.2ha。 ■ 大麦 5.0ha、大豆 4.0ha を集落営農組織として作付。 ■ 地域では定年退職者が農業経営を再開する傾向で、農地確保や規模拡大が困難。
	<p>【多収品種への取組状況(取り組んでいる期間や経緯等)・品種選択の理由等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 地域的に一般的な晩稲だと後作の麦に影響があるため、既に作付経験のある「どんとこい」の中稲が時期的に適していると判断し選定。
	<p>【多収を達成するために取り組んだことについて】 (播種形式・施肥方法・水管理等、生産性向上に向けた取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 効率化し辛い山間地域において、基本的技術を励行し、工夫を重ねて栽培を行う。 ■ 土壌診断を実施し、養鶏場から直接購入した発酵鶏糞を診断結果に基づき施用。 ■ 田植え時に一発肥料を側条施肥した後、葉色等考慮し、背負い散布機で適宜追肥。
	<p>【その他コスト削減等の取組があれば具体的に記載】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 圃場周囲の草刈り等を徹底し、カメムシ等の発生を防ぎ、防除費用を抑えている。 ■ 雑草防除については田植えと同時に一発除草剤を散布し、約 20 日後に中期剤を水口処理で施用することで手間を減らしている。 ■ 自家製のくん炭を混ぜ育苗箱を軽量化し、プール育苗することで管理等の労力軽減。 ■ 乾燥調製設備を所持しており、収穫作業後にトラックから降ろしてフレコンに詰めるまでのラインが整備されているため、運搬の負担が軽減されている。 ■ ほ場の標高差により、同品種間の作期を一週間程度ずらし、作業競合を避けている。 ■ 集落営農組織全体でブロックローテーションを行っており、水田・大麦・大豆の 2 年 3 作で、水田と転作田のローテーションを組むことで湿害の軽減を心がけている。 ■ 出荷時はフレコン出荷を行い、コストを低減している。